

瀬戸内の島嶼集落のサステナビリティ・システムに関する研究

— 山口県・祝島集落、広島県・宮島集落等々の集落を対象とした考察 —

主査 森保 洋之*¹

委員 橋部 好明*², 菊川 照正*³, 星出 直也*⁴, 池田 亜依*⁵

本研究は、祝島集落を中心とする瀬戸内の島嶼集落を対象に、集落の持続性の仕組みに係る考察を行い、次の結果を得た。島嶼集落には、(1)相互扶助的な要素が多く、共助・共同社会の意識が強く根付く。(2)地形や風等の厳しい自然環境から、家・通り・まち等をつくり、守る工夫の存在。(3)自然環境を基礎に、家・通り・まち等の空間構成に及ぼす、集落の生活・社会構成要素の存在。(4)限られた土地等の条件の下、互いに支え合いつつ、集落独自の生活・空間構成を形成、その仕組みの保有。(5)独自の再生技術により、絶えない集落再生の実行。(6)これらの集落の持続性の仕組みが、その伝承への下支えとして存在。等々が認められる。

キーワード : 1) 瀬戸内海, 2) 島嶼集落, 3) 山口県・祝島集落, 4) 広島県・宮島集落, 5) 他の集落,
6) サステナビリティ・システム, 7) 空間構成, 8) 生活構成, 9) 集落再生, 10) 持続可能社会の形成

RESEARCH ON THE SUSTAINABILITY SYSTEM OF THE ISLAND SETTLEMENT IN SETONAIKAI (SETO INLAND SEA)

— Consideration for the Iwai-shima settlement in Yamaguchi Pref., the Miyajima settlement in Hiroshima Pref., and the others —

Ch. Hiroshi Moriyasu

Mem. Yoshiaki Hasibe, Terumasa Kikugawa, Naoya Hoside and Ai Ikeda

This study performed consideration concerning the sustainability system of the island settlement in Setonaikai (Seto inland sea) besides the Iwai-shima settlement. And the following was obtained. (1) The settlement constitutes space original with the settlement from under limited land conditions. (2) The element of a life and social composition of the settlement exists being connected with the space composition of the settlement. (3) The settlement is being continuously reproduced with original reproduction conditions. (4) The sustainability system of the settlement exists as support to the technical tradition for maintenance of the settlement.

1. 研究の背景・目的

祝島集落^{注1)} (集落位置: 図 1-1) を中心とする空間構成に関する研究を、集落の有様や集落の研究課題等の認識を繰り返しながら細々として行ってきた^{注2)}。その研究の背景・経緯・手順は、次のようである。①集落の空間構成の把握, ②集落の生活形態・生活組織の分析, ③集落の社会組織に関する考察, 等である。実は、調査に赴いたある日、「空き家を壊そうとしても、廃材の処理ができないため大変だ。」ということを祝島住民から聴取した。そこで、祝島集落について調査してみると、実際に住宅内部の構造材、造作材のいたるところに古材が再利用されていた。古材利用の状況もかなりの程度差・用途の違いがあるように思われたが、こうした家の状況から、住宅の建て方におけるサステナビリティの構造が分かってくるように思われた。と共に、「練堀通り (路居)」 (図 1-4) や「まち」についても、サステナブル



図 1-1 祝島・平郡島・宮島等の集落の位置

な課題があるものと思われた。このようなことから、④以上の集落の実態把握から、古材利用や、道や共用空間の管理等の集落の持続性に関わる内容の把握 (抽出), ⑤持続性に関する調査研究, ⑥集落 (持続性) 研究から集落再生支援, 等の認識の下、瀬戸内の島嶼集落のサステ

*¹ 広島工業大学・環境学部・大学院工学系研究科 教授 (工学博士)

*⁴ 萬屋材木店 社員 (修士 (環境学))

*² 山口県上関町教育委員会 教育委員長

*⁵ ランドブレイン株式会社・福岡事務所 社員 (修士 (環境学))

*³ 巖嶋生活文化研究所 代表

ナビリティ・システム、つまり“持続的な仕組み”に関する研究を行うことにした^{注3)}。これまで祝島集落は、今までの研究で、様々な要素が複雑に絡み合ってつくられた集落であることがわかっていく。それ故に、空間構成は、生活形態や生活組織、祭事とも深く関わり、物的なものだけでなく社会的な要素も集落を形成する重要な要素として取り上げてきた（図1-2：用語の説明は図1-4参照）。更に、現在までの現地調査を通して、住宅の廃材利用、練塀や練塀通りの修復・共同管理、および、惣・講・株、等の集落の社会組織の構成（後掲：表4-3）から、様々な持続性の特徴が垣間見られ、それらの要因について明らかにすることが求められてきた。また、空家の問題、生活組織の衰退、等の集落の課題や問題点、等々が研究等の過程で、浮き彫りになってきていた（図1-3）。本研究は、持続性への予備的な考察や祝島集落の生活・空間構造の既往研究からまとめた、図1-5の枠組みをもとに、祝島集落における生活・空間構造の持続性の内容と、それら相互の関係性を分析するものである。集落の持続性調査を、祝島集落を中心に行い、その枠組みについて考察してきたが、集落としての共通的な持続性の枠組みや特徴を見出すため、他の集落も調査する必要性があり、他集落として宮島門前町の東集落ほかの6集落、つまり、全7集落^{注1)}を取上げ（集落の位置：図1-1）、持続性の考察を行うものとした。更に、持続性の枠組みと、集落再生との関わりを考察も行い、集落再生に向けた枠組みの抽出も試みることにしたい。

2. 既往研究における本研究の位置づけ

本研究と国内研究との対比を行なうと、住宅・宅地の循環的利用や転居^{文1)}、^{文2)}、住居変容と親族ネットワーク^{文3)}、集落地の環境評価と持続性^{文4)}、集落地内諸集団と集落活動の持続性^{文5)}、集落の持続性の変化^{文6)}、等々が、一部において、本研究と関連・類似している。更に、漁村集落の持続性^{文7)}、住居を核とした持続性^{文8)}、等々が、近年一部において、本研究と関連・類似している。以上の全体よりみて、本研究の様に、家・通り・まち、それぞれにおける持続性と、それらのシステム性、その伝承性に関する研究ではなく、本研究と同様の内容・スタンスの研究は見受けられない。つまり、本研究は、独自性があるものとする。本研究は、集落の空間構成要素や、それと係る生活構成（組織・ほか）との関係、そのことを基盤とする、「集落の空間・生活構成に係る持続性」に関する研究である^{文13～文18)}。

3. 研究・調査方法

この度の集落調査の方法としては、集落共通に、現地の現状調査、住民へのインタビュー調査、文献調査、等を行っている。祝島・宮島では、更に、大工・石工・左

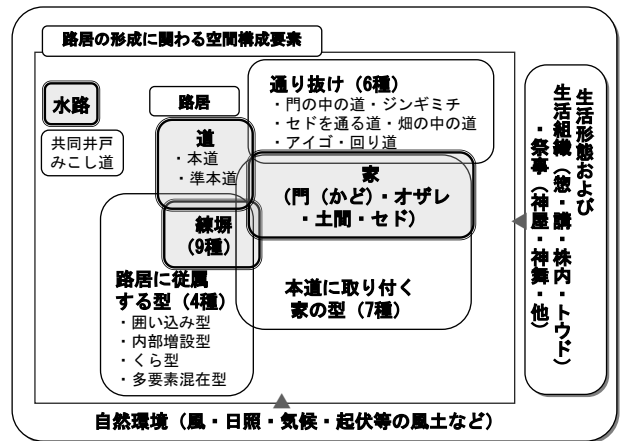


図1-2 祝島集落の空間構成・生活構成等の要素と自然環境

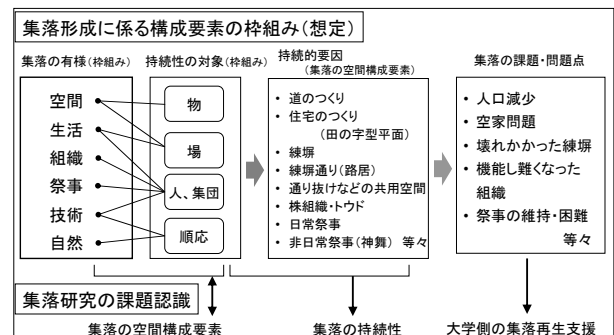


図1-3 集落形成に係る構成要素の枠組み(想定)と集落研究の課題認識(祝島集落を中心とした場合)

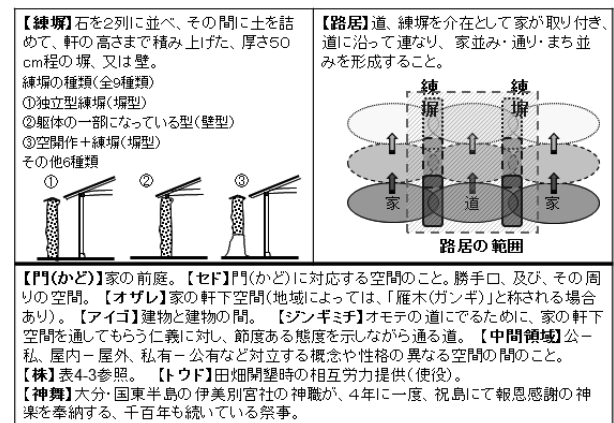


図1-4 祝島集落の練塀、路居（練塀通り）、用語解説

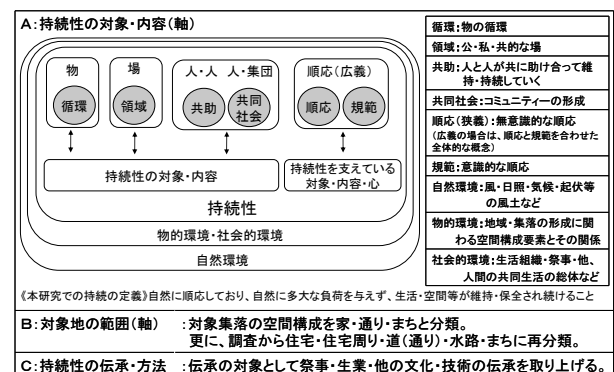


図1-5 持続性の枠組み(仮説)

官等の職人の方々へのインタビューも調査に加えている^{注1)}。更に、これらの実態調査ほかより得られた内容により、各集落の現状を分析・考察し、生活・空間構成に関する持続性の要因を明らかにすることにした。

4. 集落の持続性の考察

4.1 持続性の枠組みの考察

本研究の持続の定義として、「自然に順応しており、自然に多大な負荷を与えず、生活・空間等が維持・保全され続けること」とした。この持続の定義を踏まえて、祝島の既往研究を再度、持続性の観点から考察した。また、祝島で現地調査等のプレ調査も複数回行った^{注4)}。その結果、集落には、自然環境を基盤とした物的環境と社会的環境が存在していること。集落の持続性には、島嶼集落であるが故の、持続性の対象・内容と持続性を支えている対象・内容・心（考え方）が存在していると考えられること。図1-5のA軸が当初注目されたが、持続性の内容の相互関係を見出すため、新たな、B軸、C軸を図1-5のように枠組みに追加した。B軸については、家・通り・まちと分類していた対象集落の空間構成を、持続性の対象地の範囲（軸）：Bにより、「住宅、住宅周り、道（通り）、水路、まち」に再分類した^{注5)}。また更に、持続性を時間軸で捉えたとき、集落の文化や技術は、持続性の内容を伝承する、また、持続性の伝承方法と深く関わっていると考えられる。その意味で、持続性の伝承・方法：Cとして「文化・技術」を取り上げることとした。つまり、本研究では、研究の枠組みのAに、BとCを新たに持続性の枠組み（仮説）に加えている。この枠組み（仮説・考え方）（図1-5）をもとに、以下、集落の持続性の内容の関係性を分析する。

4.2 祝島集落における持続性に関する基礎的考察

祝島集落は、島嶼部ゆえに自立性が求められており、そのため、様々な持続性の特徴が集落内で形成されてきた。その特徴は、以下の3点である。1）“家”の持続

性：島嶼部ゆえに住宅の廃材処理が難しいことから古材利用を行っている。2）“通り”の持続性：壊しても再度利用可能な材料を用いた塀とも壁とも見られる「練塀」と、その練塀が連続する「練塀通り（路居）」が形成されている（図1-4）。3）“まち”の持続性：1）、2）と関わる相互扶助的な集団の「株」や「惣・講」等が生活組織として集落に存在している（後掲：表4-3参照）。ここでは、これら3点を中心に持続性に関わる要因を再考察し、それらの絡みについて、図1-5の各要素と関連づけて、新たに考察を加えることとした。まず次に、家、通り、まち等の別に、持続性の考察を行い、次いで4.3にて、株・生活等の考察を行うことにしたい。

1) 家の持続性の考察

住宅・寺の材料、古材の置き場（図4-1参照）、住宅の間取りは、家の持続性の対象では、「物」の循環に属するものである。「場」の領域には、田畑までの道や水路、住宅の周りがあり、表4-1に示すように、「中間領域」の門（カド）・オザレ・ニワ・セドが、「人・集団」である共同社会には、住宅の作り方、田畑の開墾、田畑の農作業が含まれる。これらの内容は、さらに「順応」等の対象にも関わりをみせている。家のまわりについて、表4-1により更にみると、門の中の道、ジギミ

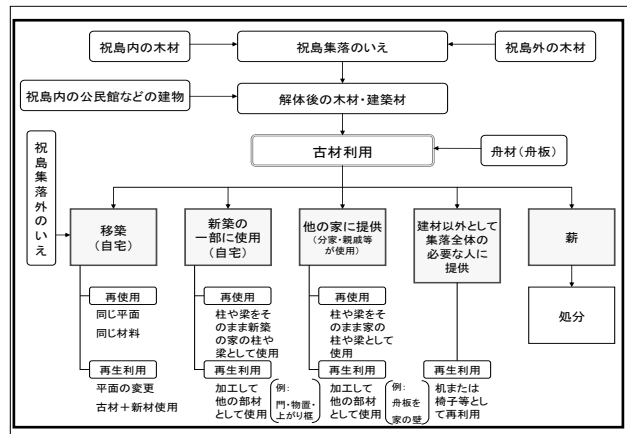


図4-1 祝島集落の古材利用状況

表4-1 祝島集落の空間構成要素の性格付け（本論文の図1-2の構成要素の詳細を示したもの）

枠組み		構成要素		平面的分類（別表参照）			立体的分類		空間の性格付け （別表参照）		調査方法	別表					
				土地の所有	土地の利用		空間形態	生活行為・機能	日常	非日常		土地の利用					
					日常	非日常										土地の所有	公有
別表的性格 ③	中間領域	通り抜け （便利道）	門（かど）		私的	私的	私的	家の前庭	日常は庭の利用。神舞・冠婚葬祭の準備。近隣交流の場。	私	私	① ② ③ ④ ⑤ ⑥	【土地の所有】 ・公有：国、市町村、又は集落等が所有していること。 ・私有：私人が所有していること。個人の所有。				
			オザレ（又は、オダレ）					軒下空間 幅：約 900cm	農作業、物置				【土地の利用】 ・公的：大勢の人が、それぞれの様々な目的で利用している様。				
			ニワ（土間）					土間	家事。近隣交流の場。				・公的：人が、共に、特定の目的で利用している様。				
			セド					勝手口、及びその周りの空間	家事。近隣交流の場。				・私的：人が、自分自身の目的で利用している様。				
			門の中の道					門（かど）	近道。近隣交流の場。				【備考】 ①：観察調査／②：写真撮影／③：聞き取り調査（住民）／④：聞き取り調査（一般居住者）／⑤：実測・図面（分析）調査／⑥：文献調査、他				
			ジギミチ					門（かど）、軒下空間 道幅：約 90cm（最低）	奥の家の人が、表の家の門（かど）、軒下を通る。近隣交流の場。								
			セドを通る道					セド同士をつなぐ道	近道	準私	準私						
			畑の中の道					畑のあぜ道	共同戸井ほかに行くための近道。近隣交流の場。								
			アイゴ					建物と建物の間	近道								
			回り道					建物のまわりの道	近道								

住総研 研究論文集№ 39, 2012 年版

識・助け合うという意識が醸成されていたことが伺えた。

本研究では、新たに、持続性の内容 1～24 の相互の関係性を考察した（図 4-2）。また、持続性の枠組み B と持続性の内容のそれぞれの相互の関係性、さらに表 4-2 の持続性の要因①～⑥に関連する範囲をも示すものとした。図 4-2 から、1～24 の持続性の内容それぞれが、他の〔持続性の対象や内容〕、更には、他の〔対象地の範囲〕である持続性の内容と係りを見出していること。特に、「中間領域関係」「練堀関係」「トウド」「株組織」を中心に、持続性の要因の他の〔持続性の内容〕と係りを見出していること。また、〔持続性の要因〕の①～⑥の範囲を中心に見たとき、持続性の内容の各項目が、当然に、①～⑥の要因で説明されること。持続性の内容の各項目の多くは、複数の〔持続性の要因〕と関係を持っていること。等々が考察された。

また、持続性の内容の相互の関係を詳しくみるために、更に考察を行った。ここでは、持続性の内容の中で、祝島集落にとって生活・空間構造で特徴的なもの 6 つ【練堀・路居・中間領域・株・トウド・神舞】の内容を取り上げ、その他、持続性の内容との関係性の考察を行った。インタビュー調査などの実態調査をもとに、表 4-4 を作成した。その結果、それぞれの関係性が伺えた。全体的に、「人・人の共助」や「人・集団の共同社会」の関係性が、持続性の内容と関連するものが多く、続いて、「順応」や「場の領域」であった。また、具体的に内容を横軸（6 つの持続性の特徴的な要因）でみると、表 4-4 に示す通りであり、関連する内容同士の同表中の丸印の付けられ方から判断して、「練堀関係」では、「場の領域」から、「規範性」の内容までに関係性がみられた。「路居」「中間領域」では、特に「共助」の内容から「順応」の内容に関係性があつた。「株」については、「物の循環」に関連する内容から、「順応」までの内容に関係性がみられた。「トウド」では、特に「共同社会」に該当する内容が多く、「神舞」は、「場の領域」や「共同社会」の内容と関係性があつた。なお、「株」については、特に、持続性の内容と関連するものの多いことが分かり、持続性の重要な要素として取り上げることができるものといえる。

4.3 祝島集落における持続性に関する分析と考察

1) 株を中心とした新たな分析と考察

これまでの研究・考察^{文 9)～文 12), 注 7)～注 8)}のなかで、祝島集落に存在する「株」が、家・通り・まち等の持続性に関係していることが明らかになりつつある。ここでは、「株」を中心とした考察を深め、持続性の仕組みに迫りたい。まず、株についての理解のために、祝島集落における今までの成果を再掲し、再考察や新たな分析を行うことにしたい。

表4-3 祝島集落の生活組織

名称	行為・機能	集住のカタチへの反映
惣(そう)	祝島のような村落は、その範囲内に住む惣で(すべて)の構成員により形成されていたことから、惣村と呼ばれるようになった。	中
講(こう)	冠婚葬祭を共助共縁で行う単位のひとつであったと考えられる。講の内部は、連帯意識により結合していたと推測される。講は村の神社や寺での各種行事により結合したと考えられる。	中
区(く)	自治会区のまとまりは「区長」が取り仕切る。祝島集落は現在、1区内平均20軒の17区に整理されている。	中
株(かぶ)	ある範囲の土地の開墾許可をもらい、数人で協力して開墾する形態をいう。開墾した土地の分与する主体を株の本家といい、株の本家と、土地を分与された複数戸の分家を総称して「株内」という。この中には同時に、親戚関係の本家と分家も存在している。開墾した土地を本家が分家に分与することを「株分け」という。	大
トウド	田畑開墾・ほかの相互の労力提供(使役)。トウドは「田人」と表記される地域もあるが、祝島では漢字で表記せず。一般的に言われる結(ゆい)と同様のもの。株の範囲で行われる場合がある。	中

[集住のカタチへの反映] 大:反映が大きい。 中:反映が中程度。

「株」は、本来、農業株と云え、農業を主な生業とするもので、田畑を分け合って生活するための相互扶助的な存在として、祝島集落では、少なくとも寛政年間には、その形態を表している(表 4-3・文 11))。現在、明らかになっている株の数は 53 株(文 12) 参照)であり、その範囲・位置を図に示すと図 4-3 のように集落全体に配されていたことが分かる。また、祝島の「株」について、民俗学者：宮本常一氏の論文^{文 9)}がある。同氏は、「祝島では、本家と分家間の秩序は弱く、また、土地の所有観念も比較的弱く、家族労働に依じて土地を持つという共有観念が強い。」こと等を述べている^{注 9)}。集落住民への私共のインタビュー調査からも、「現在、株内の機能としては、薄れてきているが、株内があることで、人と人との共助意識がつくりだされていたのではないか。」という意見が複数あつた。実際に、島内の畑の土地が株内同士で並んである場所が残っていた。

これらのことから、総じて、祝島集落には、集落の中で緩やかなヒエラルキーをもちつつ、細分化された共同の仕組みとしての「株」が存在していると理解できる。

更に、「株」の構成形態を整理してみた。その結果、表 4-5 に示す通り、「集合型」：本家と分家が 1 つの敷地に集まっている株、「分散型」：本家と分家が分かれて居住している株、「分離型」：大きく分散していないが、2、3 つに株範囲が分離している株、等々の 3 種があげられた。次に、株の構成形態・範囲と本道・準本道との関係を分析した。本道とは、冠婚葬祭の際に通る、集落に古くからある主要な道のことである。なお、本道と機能・用途が同様と考えられる道を「準本道」としている。分析結果を、表 4-5 により更にみると、株の構成形態は、「集合型」が多く、また、その株範囲の中を主要な道が殆ど通ることなく構成されており、「株」の範囲・まとまりを大事にしつつ、集落が形成されてきたことが考えられる。このように、「株」は祝島集落の形成に深く関わっているものといえる。

本研究では、「株」の範囲の模式化を行った(図 4-4)。検討の結果、「株」の構成要素は、①本家・分家、

②畑、③井戸、④下水（水路）、⑤練塀の5つである。今回、模式化を行ったA邸を中心とする《新右エ門》株の範囲では、この5つ全部が含まれていた。図の作成は、公道（赤線）・水路（青線）が示されている地籍図（文12)), 現地での確認調査（実測調査含む）、更に、A邸の住民や町の古老へのインタビュー調査、等により行った。図4-4の本家には、近くに「株」で使われていた共同井戸がある。本家のカドは、株範囲の中央にあることから、「株」のカドとも考えられた。このように、株組織を中心にみることで、集落の空間構成要素がどのように構成されてきたのかが、明らかになったと考える^{注7)}。

現在、株組織は、資料も少なく、生活組織として機能

しにくくなってきているのが現状である^{注8)}。祝島集落の形成過程に深くかかわる株組織の意味や機能を、集落の住民と共に確認してきたが、更に深い、株組織の記録化を行い、後世に残し伝える重要性も求められている。

2) 生活組織と行事・祭事に関する分析と考察

持続性の内容で、人・人、人・集団の関わりが大きい事が考えられるものに、まちなかに存在する生活組織がある。伝承方法として、祭事・行事を実際に行うことで技術・文化を伝承するものといえ、このことにも生活組織が深く関係していよう。ここでは、生活組織と行事・祭事との関係性を分析することで、行事・祭事がどのよ

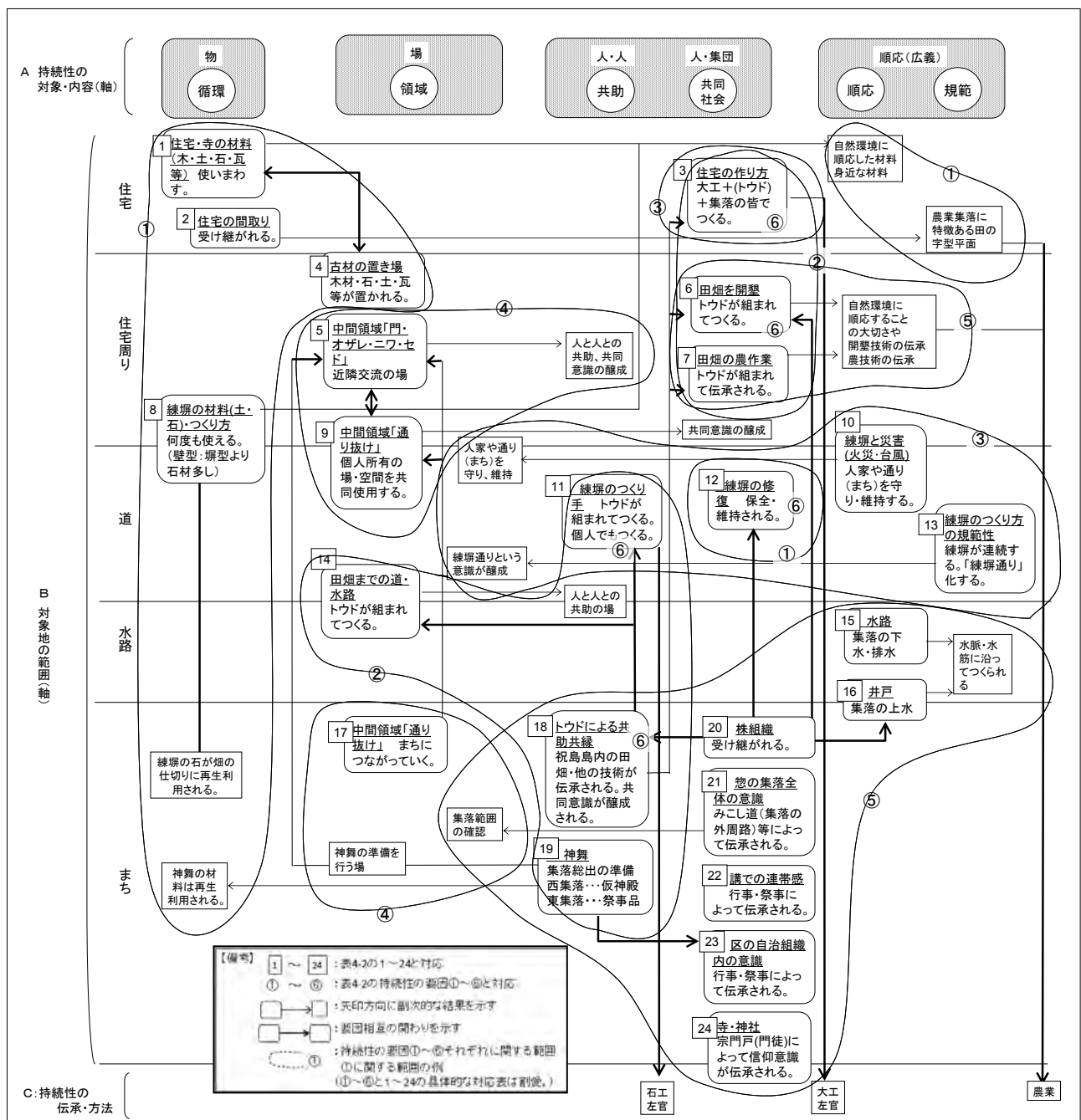


図4-2 持続性の内容・要因と、本研究の図1-5の枠組み：A・B・C、及び、要因相互の関わり（祝島集落）

表 4-4 持続性の要因と持続性の内容との関わり（表 4-2 及び図 4-2 の内容の表形式化＋追加考察）（祝島集落）

【表の全体に亘る備考】			持続性の内容（表4-2 の1～24 と対応）																								
備考1） 持続性の特徴的な内容は、持続性の対象（物・空間、人・集団）に属する下の表中の6種を取り上げ、関連する持続性の内容の1～24の中より該当するものを記載。 備考2） 持続性の特徴的な内容と持続性の内容と関係性が深いものに●を付した。持続性の特徴的な内容に属する持続性の内容は、同内容の為、対象外として「－」を示した。			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
			住宅の寺の材料（木・土・石・瓦等）	住宅の閑取り	住宅の作り方	古材の置き場	「門」オザレニ「フ」セ	田畑の開墾	田畑の農作業	練堀の材料（土・石・つくり）	中間領域（海）	練堀と災害（火災・台風）	練堀のつくり方	練堀のつくり方の規範性	練堀の修復	練堀のつくり方の規範性	田畑までの道水路	水路	井戸	中間領域「海」の取り扱	トウドによる共同共縁	神舞	株組織	惣の集落全体の意識	講での連帯感	区の自治組織内の意識	寺神社
持続性の特徴的な内容	物・場	練堀 関係	8・10・11・12			●				－		－	－	－	●		●			●		●					
		路居	13							●		●	●	●	－							●					
		中間領域 関係	5・9・17				●	－			－									●	－		●	●			
	人・集団	株	20	●		●	●	●	●			●		●				●			●		－		●		
		トウド	18			●			●					●				●		●		－		●			●
		神舞	19					●														－		●			●
【表を横にみて●が付している箇所の説明】 【練堀 関係】 4 古材置き場は、練堀の材料（石・土）も置かれている。また、置かれていた。 13 練堀のつくり方の規範性は、1軒の練堀が隣とつながり、連続している景観を作り出している。 15 水路が一部、練堀の下につくられているところがある。 18 トウドによる共同共縁で、トウドが組まれて練堀がつくられていた。 20 株組織の株範囲を練堀が囲んでいる（輪型）。【路居】 8 11 12 練堀の材料・つくり方、つくり手、修復によって、練堀通りを形成し、路居を形成している。 10 路居となつて練堀通りが存在する事で、火災や台風から人家やまち並み通りを守る事ができる。 18 路居となつて練堀が存在する事で、火災や台風から人家や通り、まち並みを守る事ができる。【中間領域 関係】 4 古材置き場は、中間領域の空間におかれることもあり、その場所にある古材は、誰でも使えるものであったと考えられる。 16 井戸の周りが中間領域となる。 19 神舞の準備は、中間領域の空間で行われている。 20 株組織の株範囲で中間領域がある（株のカド）。【株】 1 住宅の材料など株組織の株範囲で古材利用されている。 3 6 7 12 住宅のつくり方、田畑の開墾・農作業・練堀の修復が株うちでおこなわれていた。 4 株範囲での古材置き場があったと考えられる。 5 株範囲で使われていた中間領域があったと考えられる（株のセド）。 10 株範囲を練堀が囲んでいたことから、災害から株範囲が守られていた。 15 水路は、株範囲の周りを流れている。 16 株範囲で使われていた共同井戸がある。 18 トウドによる共同共縁は、株で組まれていた。 22 講での組み方を、株が下支えている可能性がある。【トウド】 3 6 7 11 14 16 田畑までの道・水路、住宅、田畑開墾、農作業、練堀づくり、井戸づくりは、主にトウドが組まれて行われていた。 20 株組織でトウドが組まれていた。【神舞】 5 神舞の準備は、中間領域の空間で行われている。 21 惣の集落全体の意識は、神舞の祭事をおこなうことで醸成される。 23 神舞に使用する古は、区ごとに準備する。																											

うな生活組織の範囲で行われているのかを明確にし、集落の空間構成だけでなく、それらと関わりある生活組織との関係性を見出すことにした。

そこで、生活組織（表 4-3）と行事・祭事の関わりについて、文献調査や住民へインタビュー調査の結果も加えて、資料を作成（割愛）した。その結果、祝島で行われている行事・祭事は、生活組織と強く関連していることが分かった。集落の集合の単位（広い範囲のときは集落全体、小さい単位になると区）を大切にしながら行事・祭事が行われていた。また、「トウド」は「株内」を支えていた組織、「株内」は「講」，「講」は東・西等の「地区・村」，「地区・村」は「惣」の祝島全体、等々を支えている組織として理解することができた。

4.4 集落相互の持続性の比較

1) 祝島集落の持続性の特徴

図 4-2 の分析・考察から、祝島では、各要素が、図 4-5 のような関係を示した。持続性の要因の相互関係が線分で結ばれ、集落全体がネットワーク化している点が指摘できる。持続性の対象地の空間・構成軸のキーワードを、それぞれ、図 4-5 の最下段に示している。このように、生活組織の「株」等に支えられながら、「練堀」や「祭事（神舞）」，「通り抜け」の道、等々が持続性に大きく関わり、存在しているものとみられる。

2) 宮島集落の持続性の考察とその特徴

集落の共通的な持続性や、祝島の特徴を見出すため、同様に、宮島門前町の集落に対して、持続性の枠組み：図 1-5 をもとに、持続性の内容について、実地調査、インタビュー調査等を行った。その結果、図 4-6 で掲げた、*1～*9 の内容が抽出され、これらを、図 1-5 の A：持続性の対象・内容別に分類した。また、それらを、図

1-5 の B と C に位置づけ、持続性の枠組みについて考察を行った。その結果、現段階では、「通り」に属する「通り抜け・小路・路地、等」や、「祭事」等々の要素が、集落の持続性に係る重要な要素である点が得られている。全体としてみて、宮島では、図 4-7 の最下段に示すような空間・構成軸に係るキーワードが得られた。

3) 平郡西・東集落の持続性の考察とその特徴

以上と同様に、平郡島の西・東の 2 集落を考察した。図 4-8 がその結果^{注10)}である。まちに係る「やといど」「役目制度」（図 4-8 下段参照）が特徴である。

4) 他の集落の持続性の考察とその特徴

沖家室、御手洗、姫島^{注11)}等の各集落の持続性に係る考察とその特徴に関して、同様に分析を行ったが、各集落共通に、祝島集落と類似する点が多いと云う結果であり、特に沖家室の場合、その性格は強いものであった。

5) まとめ—集落間の比較

集落を比較すると、それぞれ異なった構成が見られた。例えば、宮島の場合は、「通り・脇小路・小路・路地」と段階的な、かつ準格子状の道の構成があるのに対して、祝島の場合、相互連関的な通り構成となっていた。また、祝島の道は、複雑に絡み合っている生活路地的であるのに対し、宮島の道は、表と裏がやや明確に分けられていた。このように各集落には、形態上の相違が見られ、7 つの集落には、主に 2 つの道路形態がみられた。しかし、持続的な仕組みについてみると、実は、図 4-5、図 4-7、図 4-8 の最下部に示すように、それぞれ異なる要素が得られ、それぞれの集落の特徴が見出された。また「共」の意識が集落共通に存在しているが、その強弱は、集落個々に相違していた。更に、農漁業・商業という産業構

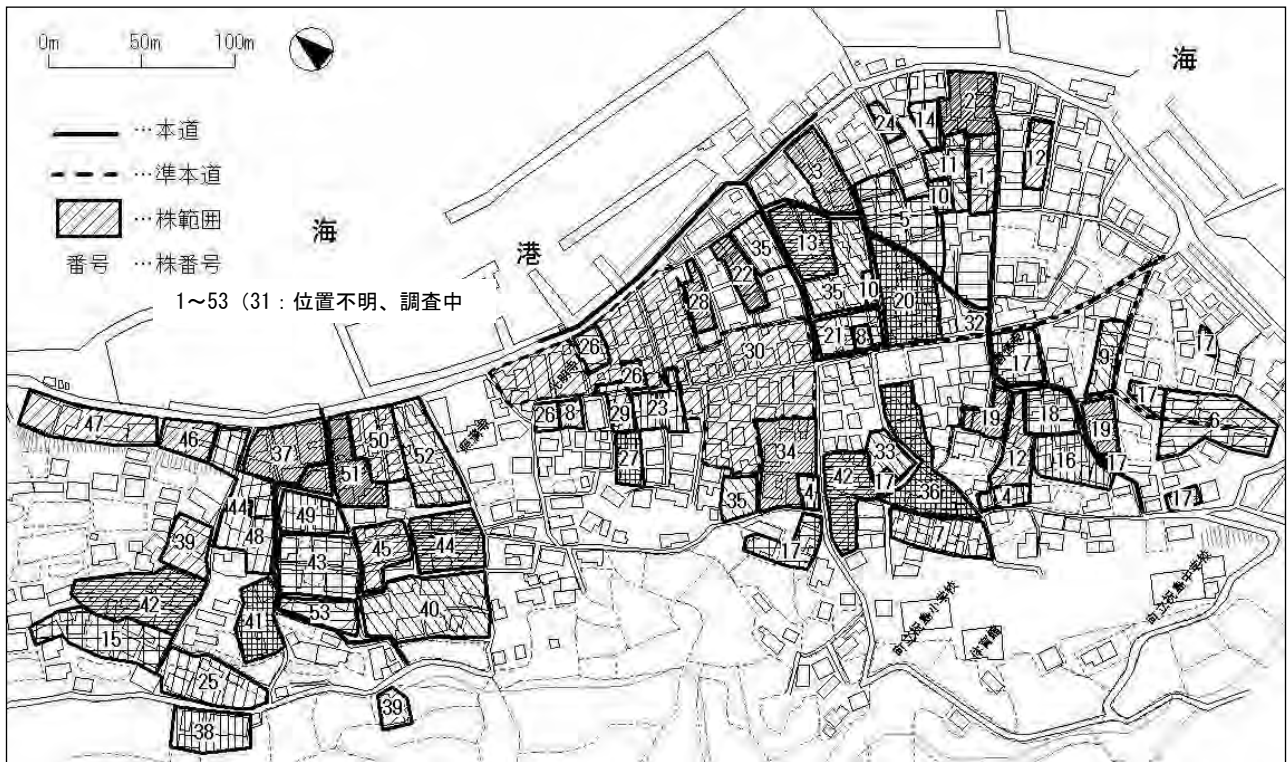


図 4-3 株範囲(文 10)、ほか の明治時代の株内一覧から作成)と本道・準本道の位置 (祝島集落)

成による相違も存在していた。持続性の枠組みの検討の中で、各集落の特性が、浮き彫りになったものといえる。

5. まとめ

祝島集落、宮島集落ほかを取り上げ、持続性の内容の相互の関係性や集落間の比較の考察をしてきた^{注12)}。集落の持続性の内容と、それら相互の関係を分析した結果、集落共通して、持続性の内容が個々別々にあるのではなく、相互に関連していることが分かった。また、7つの集落について、持続性の考察を行った結果、図 1-5 の持続性の枠組みに沿って、ほぼ無理なく考察を行うことができた。これらによって、図 1-5 の持続性の枠組み(仮説)の、A・B・C 軸の見方は有効であったと考えることができよう。以上から、表 5-1 は、各集落の空間構成、生活構成、更に、まち集落形成について整理したものであり、図 5-1 は、島嶼集落全体としての生活・空間構成の側面から見た持続性のまとめである。その図 5-1 から、後掲の(1)～(6)の6項目が得られた。

集落の持続性をみる上で、集落の課題・問題点もみられた。集落が現在まで、持続してきた理由として、再生への取り組みが、多々行われてきたものといえる。実は、祝島では、練塀の修復、株組織の確認、神舞の復興、等があげられる。この3項の内、前2項は、本研究関連にて直接に支援を行ったものである。なお、祝島未来航海プロジェクトは、数年前に住民自体が立ち上げ、産業の自立化が目途とされている。集落は絶えず、集落の持続性を図ると共に、再生への取り組みを行ってきたといえ

表 4-5 株の構成形態・範囲と本道等との関係 (祝島集落)

[I] 株の構成形態	[II] 株範囲と本道・準本道との関係		
	Ⅰ. 集合型	Ⅱ. 分離型	Ⅲ. 分散型
A. 株範囲が本道・準本道と接している。	1,2,3,5,6,9,13,16,18,20,21,30,32,34,40,41,43,48,49,51,53	19 (8) (12) (35)	
B. 株範囲の中を本道・準本道が通っている。	37		
C. 本道・準本道から離れて株範囲がある。	7,11,14,15,22,23,24,25,27,28,29,33,36,38,44,45,46,47,50,52	(8) (12) (35) 4,10,26,39,42	17

(備考1) 番号: 株番号 図4-3 の1~53と対応 (備考2) 3,6,7,11,12,16,19,20,25,30,34,40,42,45: 総本家を含む株 (備考3) (N): 本家を含む株範囲 (備考4) 株番号31: 位置不明

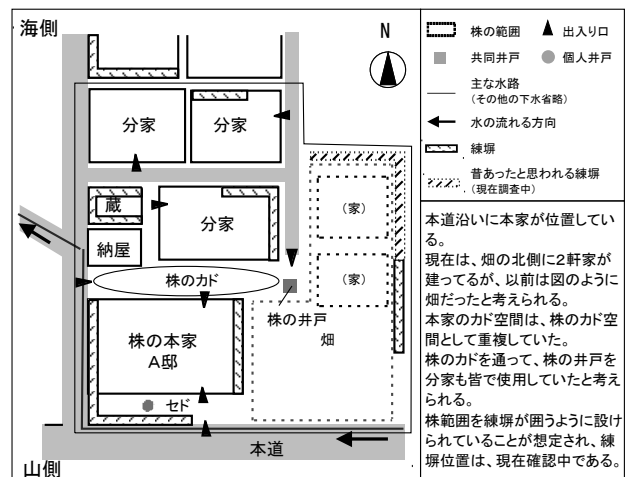


図 4-4 集合型の株範囲の模式図(A邸を中心とする新右工門株の例。図 4-3 の株番号 5 に対応) (祝島集落)

よう。

持続性の枠組みは、こうした再生の枠組みにも応用・展開可能であると考えられる。集落環境の状況によって、持続性や再生の要素・技術は変化する。そのため、集落個々の状況をよく把握すること、それに適合する再生を行うことが重要である。

以上のことから、集落の生活・空間構成（構造）が持続するためには、再生が必須であり、集落が持続的であることは、再生の仕組みを併せもってきたものといえよう。

以上、本研究が、特に明らかにした内容は、図 5-1 の下段の持続性の要素・技術の欄に示す通りである。つまり、（１）相互扶助的な要素が多く、共助・共同社会の意識が強く根付いていたこと。（２）地形や風等の厳しい自然環境から、家・通り・まちをつくり、守る工夫がなされていたこと。（３）自然環境を基礎に、家・通り・まちの空間構成に及ぼす、集落の様々な生活・社会構成要素の存在があること。（４）総じて、調査集落は、限られた土地等の条件の下、互いに支え合いながら、集落独自の生活・空間構成の形成のしくみをつくってきたこと。（５）集落は独自の再生技術を持ち、絶えず再生を行っていたこと。（６）集落の持続性の仕組みが、その継承・伝承への下支えとなっていること。等々である。

6. 今後の課題

祝島集落以外の持続性に係る内容は、現段階では、緒に就いた段階である。現地調査、インタビュー調査等を含め、持続性の内容を更に明確なものにしたい。また、島嶼集落相互の比較・検討を更にに行い、持続性の枠組みの充実化を図りたい。本研究は、持続性研究を主とし、集落の再生についても少々触れたものの、今後の展望として、更に、再生のしくみを分析し、充実化を図り、伝承構造の把握にまで、到達することを目指したい。

<謝辞>

本研究に際し、調査対象集落の皆さん、広島工業大学「地域・集落計画研究センター」の構成員の皆さん、更に、同学・森保研究室の学部生・院生の皆さん、特に、西岡いづみ氏、坂元利衣氏、佐々木香菜子氏、劉 澤氏、下瀬瑞貴氏等々の皆さんに、多くのご協力を頂きました。また、前掲の研究センターの特別顧問をお願いしている、大阪市立大学・名誉教授：住田昌二先生には、本研究の当初から、多くの貴重なお教えと、激励とを頂きました。全ての皆さんに、心から謝意を表します。

なお、本研究実施の機会を頂き、その上で、本論文の提出に際して、多大なご理解を賜りました住総研、及び同財団の研究運営委員会に対して、謹んで深謝する次第です。

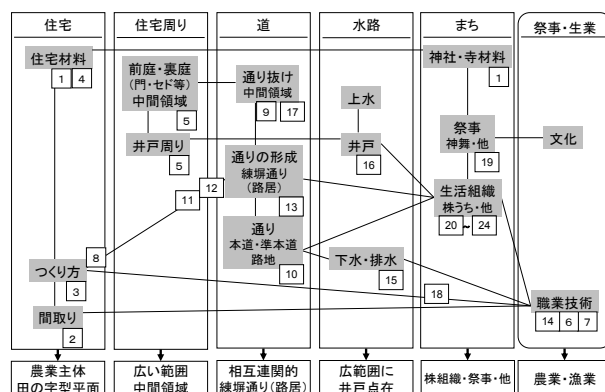


図 4-5 〈図 1-5 の枠組みの B・C〉に〈祝島集落の持続性の対象・内容〉（1～24：表 4-2 と対応）を布置した図

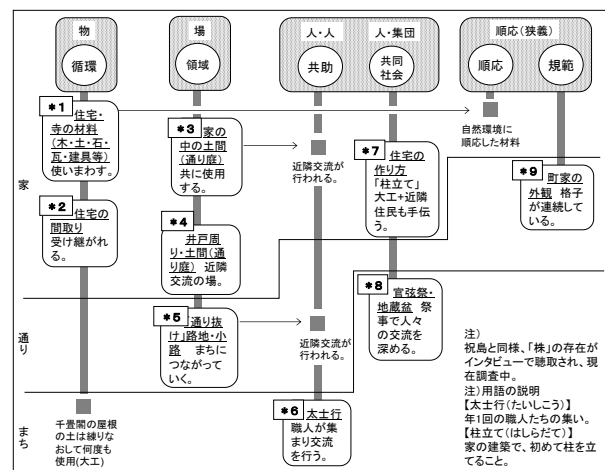


図 4-6 宮島集落の持続性の対象・内容

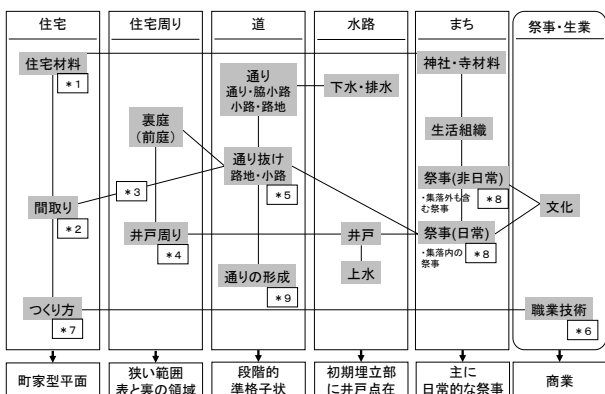


図 4-7 〈図 1-5 の枠組みの B・C〉に〈宮島集落の持続性の対象・内容〉（*1～*9：図 4-6 参照）を布置した図

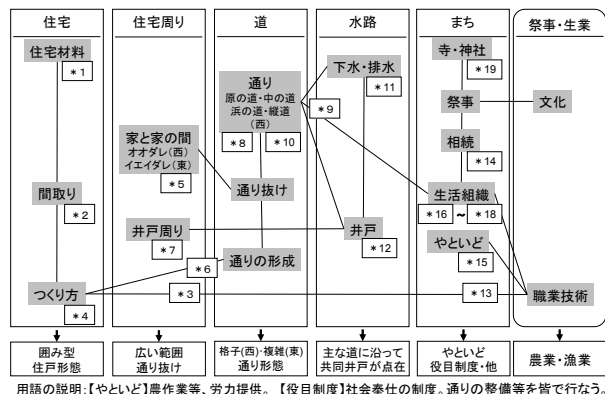


図 4-8 〈図 1-5 の枠組みの B・C〉に〈平郡集落の持続性の対象・内容〉（*1～*19：注 10）を布置した図

表 5-1 祝島集落・平郡島集落等の生活・空間構成の特徴

		祝島	平郡島西	平郡島東	その他(*)	特徴	
空間構成	住戸・平面形態	田の字型平面	口の型が多い。	コ・L字型が多い。	町家型平面(宮)	主に農家型平面	地形や風などの厳しい自然環境から家・通り・まちをつくり、守る。
	敷地境界の領域・中間領域	練堀、舟板。私有地を共同利用し中間領域化(程度:強)(規範意識)	外壁:コールタール、石垣。私有地を共同利用し中間領域化(程度:中)。(同左)	外壁:コールタール、石垣。私有地を共同利用し中間領域化(程度:弱)。(同左)	通り土間を共同利用(程度:中)(宮)	厳しい自然環境から生活を守る。中間領域化	
	通りの形態	触手型、垂直型	格子型	垂直型、触手型、	格子型(宮) 垂直型(沖)	自然環境(地形)に沿って形成	
	水路の形態	主な水路:山から海へ起伏に沿って流れる。	主な水路:山から海へ起伏に沿って流れる。	主な水路:山から海へ起伏に沿って流れる。	水路沿いに通りが形成(宮・沖)	水路に沿った通りの形成	
	通りと水路の関係	水路沿いに通りが形成[本道・準本道]水路の暗渠化による通り幅確保	水路沿いに通りが形成水路の暗渠化による通り幅確保	水路沿いに通りが形成水路の暗渠化による通り幅確保			
	共同井戸の位置と領域	共同井戸は集落全体に分布	共同井戸は主な通り沿いに配置	共同井戸は集落全体に分布	初期埋立部に共同井戸点在(宮)	共同井戸の共有化	
生活構成	(生活構成要素) 生業・相続・ほか	均分相続 農業・漁業	長子相続 農業・漁業	均分相続(分割) 漁業・農業	商業(宮) 漁業(沖)	主に均分相続・農業	共助・共同の意識が強い。(規範意識) 通りやまちをつくる制度。
	(社会構成要素) 社会組織・制度 (寺社)・ほか	相互扶助:トウド 共同社会:賦役(ブエキ)(規範意識) 青年の教育:倶楽部(現在×)	相互扶助:ヤトイド 共同社会:役目制度(同左) 青年の教育:泊り屋(現在×)	相互扶助:ヤトイド 共同社会:役目制度(現在×)(同左) 青年の教育:泊り屋(現在×)	青年の教育:トマリヤ(沖)	相互扶助 共同社会 青年の教育	
まち・集落形成	集落の形成過程・ほか	本道に沿った形成(路居)	自然環境による形成段階の変化(砂州)	地形を活用	造成による集落の形成段階(宮)	自然環境の影響	自然環境を基盤に、空間構成や生活構成とが関わる。
	海岸線側の街区単位	—	通りの形態による変化	通りの形態による変化	住宅が街区距離の単位(沖)	通りの形態の影響	
	集合の単位 (社会組織と通りのくくり)	社会組織:通り・水路・特に敷地が境界	社会組織:通り・水路・敷地が境界 通り:通りの形態による変化	社会組織:通り・水路・敷地が境界 通り:通りの形態による変化	— *【凡例】 (宮):宮島(沖):沖家室	通り・水路の影響	

【備考】泊り屋＝トマリヤ：若者が、心得・しきたりを学ぶ場所である。平郡・西集落では、宿の場所が3軒聴取・確認できた。その他にも、昔は、集落全体に配置されていたのではないかとされた。現在、機能してない社会組織ではあるが、この機能があることで、技術・文化の伝承など、集落での「教育の場」になっていたことが聴取・確認できた。

祝島・平郡島等の各集落の持続性のまとめ			持続性の対象地の範囲					持続性の伝承・方法	持続性の要素・技術
			住宅	住宅周り	道	水路	まち	祭事・生業	【対象別】
持続性の対象	物	循環	住宅の材料 田の字型間取り	練堀の材料			神舞行事の材料	農業・漁業	素材・材料の循環性 (身近な材料使用による経済性)
	場	領域	中間領域(門・オザレ・ニワ・セド・通り抜け)			広範囲 井戸点在	神舞・宮島様 海童社(夏祭り) トマリヤ (泊り屋・若衆宿)		場のつながり・場のひろがり (領域) 私有地でも共同利用
	人・人	共助	トウド・やといど			均分相続(分割)			社会組織による共同社会の意識が醸成 共に助け合う意識
	人・ 集団	共同 社会	株組織	講・区範囲 役目制度			株・惣・講・区 宗門戸 役目制度	文化・技術の伝承 共同社会の醸成(規範意識)	
	順応 (広義)	順応 (狭義)	住宅の材料	練堀の材料 練堀と災害	相互連関的 通り形態	水路・井戸	農業・漁業	ほかに倣う(含、規範意識) 自然環境を基盤とする	
		規範	農業主体の 田の字型平面 囲み型の 住戸形態	練堀のつくり方					外壁の コールタール
持続性の要素・技術 【対象地別】			地形や風などの厳しい自然環境から家をつくり、守る。	共助・共同の意識が強い。 (含、規範意識)	地形や風などの厳しい自然環境から通りをつくり、守る。	通りやまちをつくる制度。	自然環境を基盤に、空間構成や生活構成とが関わる。	【全体】共助共同(規範意識・活動、他)による共用空間化。 通り・まちをつくり、守る。生活・空間構成の形成のしくみ。	

【備考】オオダレ・イエダレ：家と家との間の空間で、平郡・西集落は「オオダレ」、同・東集落は「イエダレ」と呼んでいる。縦道(たてこう)：同・西集落において、原の道から、中道、浜の道を垂直に結んでいる道幅のやや広い通りのこと。この道は、各家の軒下を拡張して通り幅を広げたこと、その作業として、縦道を使う両側の住戸の方々が舗装を責任もって行ったこと、等々が聴取できた。現地調査の際、住民の方々が「縦道」に座り談話している姿を何度となくみることができ、コミュニケーション領域も兼ねた通りとなっていることが伺われた。

図 5-1 島嶼集落の生活・空間構成の持続性のまとめ

<注>

- 1) 対象集落の特徴を示す。祝島は、山口県上関町の離島で、大分県・伊美別宮社との 1100 年以上の交流の歴史を誇る《海をわたる神事「神舞」(かんまい)》と、石と土でできた《「練堀」(ねりへい)》、それによる「練堀通り」(命名：路居)》が特徴の起伏順応型の集落である。山口県・柳井市・平郡島・西集落は、砂州地に拓けた準格子状の集落、同島の東集落は、海側への道と海岸線の道により構成される集落、山口県・大島・沖家室(おきかむろ)は、海側への道と海岸線に平行する道とにより構成される集落である。広島県・宮島・東は、海側への道と海岸線に平行する通りと呼ばれる複数の道により構成される準格子型の集落である。広島県・呉市・御手洗(みたらい)は、起伏順応型の集落であり、大分県・国東半島北端にある姫島は、練堀が多く見られるものの、集落の空間構成についての特徴は顕著ではない集落と云える。これら 7 集落は、何れも多く路地を持つ集落である。なお、平郡・西と宮島・東とは準格子状であり、御手洗は、一部の地区に準格子状の道構成が取られている集落と云える。産業構成上は、農・漁業集落は、祝島、平郡西・東、沖家室、姫島であり、商業集落は、宮島・東、御手洗の各集落である。
次に、各集落の調査概要を示す。空間・生活関連の現地調査の主要日程・内容は、祝島：2009 年 6～7 月：予備調査、空間構成の考察・分析、7 月～2010 年 8 月：持続性要因の抽出・構造化。平郡西・東：2010 年 3 月～8 月：予備調査、空間構成考察・分析、持続性要因の抽出・構造化。沖家室：2010 年 3 月～7 月：予備調査、空間構成考察・分析、持続性要因の抽出・構造化。宮島・東：2009 年 6～10 月：予備調査、空間構成考察、11 月～2010 年 8 月：空間構成分析、持続性要因の抽出・構造化。御手洗：2010 年 5～8 月：予備調査・空間構成考察・分析、持続性要因の抽出・構造化。姫島：2010 年 8 月：予備調査・本調査であった。なお、インタビュー調査の主要時期・内容は、2009 年 6～9 月：住まいの古材の使用状況・置場、住まい・集落等の持続性関連予備聴取、11 月～2010 年 8 月：集落等の持続性要因の本聴取、集落等の修繕・再生に係る具体活動把握、株ほかの社会組織の把握・ほか、7～9 月：住まい・集落等の外壁・堀の修繕状況であった。インタビュー調査の主対象者は、住まい・集落、各内容共通に、町内会長・町衆等や住民であった。なお、祝島・宮島では、他に、大工・石工・左官等の職人の方々、更に、宮島の場合、建築家も対象に致した。
- 2) 集落は、一定の地域範囲で集住の形がつけられてきたものとする。周りを海で囲われ、無秩序に拡大することなく持続してきた島嶼集落では、高い自立性が求められている。また集落は、厳しい自然環境や周辺環境の変化に順応しながら形成され続けている。本研究では、《集落の生活及び空間構成に関する持続性》を研究するものであるが、これらは、今後、重要視される《持続可能な社会(生活や空間構造)》の形成を検討するための基礎資料になると考える。
- 3) 本研究の「持続性」については、「持続性のあり方」「その内容」等の意味を含め、「持続性」を「持続的な仕組み」と解釈して分析・考察を行うことにした。このことから、集落の「サステナビリティ・システム」について、具体的には、集落の空間構成及び生活構成の持続性に係るものに限定して対象化し、その「持続的な仕組み」と云う解釈から、持続性に関連する「モノ」「コト」に係る内容・仕組みと、更には、その「継続・伝承性」に係る内容・仕組みとを対象にすることにした。その意味で、「集落再生」「持続可能

社会の形成」とを、結果的に、遠くに見据える構図を採用したことになる。

- 4) 祝島集落でのプレ調査の結果、祝島の伝統的な木造住宅には、古材利用したものが、極めて多く見受けられた。また、家の木材の古材だけでなく、祝島では、竹・石・その他の材料も再利用されていた。更に、インタビュー調査から、古材利用の具体の利活用状況も確認できた(図 4-1 参照)。プレ調査から得られた成果から、何回かの検討の結果、図 1-5 を得た。これを仮説として、対応させてみると、先の例は、「物の循環」として考えられた。「場の領域」については、今までの研究から、祝島には、私有、公有の中間の共有の概念や、それぞれに対する各種の空間のあることが見出されている(表 4-1)。これらの領域は、集落の生活及び空間構成に特徴付けを与えているものと考えることができる。「人・人の共助」「人・集団の共同社会」については、持続性にとって社会的要素となる。祝島では、《惣・講・トウド》、更に《株(かぶ)》などの生活組織がみられ、これに依拠して、「共助」や「共同社会」の持続的な内容があると考えられた。「順応」や「規範」については、祝島集落は島嶼部特有の強い風が吹き付けるといふ、厳しい自然環境に順応しながら、集落の生活及び空間構成が形づくられ、「順応」や「規範」に関する持続性の内容が存在すると思われることができる。
- 5) 祝島集落の生活・空間構造の持続性を、「家」「通り」「まち」という 3 つの対象地範囲から考えることができるが、祝島集落の練堀は、「家」を守り、同時に「通り」を形成することから、「家」にも「通り」にも属するもので、対象地範囲それぞれの《間》の範囲がみられる。そこで、それぞれの《間》を取り入れ、「住宅」「住宅周り」「道(通り)」「水路」「まち」という 5 つの範囲として再整理を行い、こうした後者の区分を、本研究では主に用いることにした。
- 6) 2009 年 11 月下旬に、祝島住民 10 数名に、表 4-2 の 24 項目の確認のためのインタビュー調査を行った。その結果、24 項目の各項目について確認でき、持続性の具体的な内容も概ね確認できたと考えている。このような手続きを何回か繰り返して、各項目の抽出、各項目相互の関係、それらの検証、等々を丁寧に行った。文献研究により求めたものを除く、本研究の成果(図表)は、このような手続きにより求めたものである。
- 7) 株内(かぶうち)の調査では、主に明治時代の資料を用いて分析を行った。その理由は、近代の資料として明確・確実な資料である点、更に、明治時代から、株範囲の形式、つまり本家や分家の位置、株の井戸や株を取り囲むように配される練堀の位置、株範囲の中の畑など、株範囲としての物的な形式が、現代まで緩やかに継承されてきた内容を、他の資料と併せて、確認可能であった点、等々の 2 点である。
- 8) 株は、人口が多く、生活及び空間構成がより生きづいていた時期においては、持続性の重要な要素であった。株が、機能していたときは、田畑の開墾作業をはじめとする農作業など、生活する上で、重要な組織要因であった。現在においては、株の範囲は、形式として緩やかに継承されているものの、機能しているのは、本家・分家の冠婚葬祭の行事や、株の門(カド)・セドなどの共用空間や株範囲の周り(図 4-4 参照)を流れる排水溝の管理など、限定されているのである。
- 9) 文 9) にて、宮本常一氏は、祝島の株関係について、幾つかの指摘を行っている。それを要約すると次の通りである。①祝島では、「土地均分」が行われた。②農地の所有状況として、「株内制度」があった。③「土地の割替＝切替畑」も行われた。④末子相続で均

分相続。⑤本家・分家間の秩序は弱く、土地の所有観念は比較的弱く、家族労働に応じて土地を持つという共有観念が強い。⑥株は、始めは12株であり、50株内外にまでなった。以上の指摘である。このことから、土地の所有観念の弱さによる「空間の共同利用を「可」とする精神的な基盤」が伺える。また、③の内容は、極めて注目されるもので、現在の土地地区画整理事業的なことが、住民の合意で、古い時期に行われていたことになる。筆者らは、このことから、祝島の屋敷・田畑・山林等々の全ての公図を、異なる年代別に入手したが、その分析・考察については、今後に譲ることにしたい。

- 10) 図4-8の平郡島西・東集落の*1~*19の持続性の内容を以下に示す。*1:住宅の材料(木材等)、*2:住宅の間取り(田の字型)、*3:ロ・コ・Lの字型の住宅形態、*4:住宅の作り方、*5:家と家の間(オオダレ(西)・イエダレ(東))、*6:外壁仕上(コールタール)、*7:井戸周り、*8:浜の道の石垣、*9:原の道・中の道・浜の道(西)、*10:縦道(たてこう)(西)、*11:水路、*12:井戸、*13:ヨウギ山(建築材料)、*14:長子相続(西)・分割相続(東)、*15:「やといど」の相互扶助、*16:役目制度の共同作業、*17:トマリヤ(泊り屋・若衆宿)、*18:区・自治会・班での意識、*19:寺・神社、である。これらは、*1~*5は「住宅関係」、*5~*7は「住宅周り関係」、*8~*10は「道(通り)関係」、*11~*12は「水路関係」、*13~*19は「まち関係」の括りである。
- 11) 大分県・国東半島北端の姫島は、ここで扱った「空間・生活構成面からの持続性の仕組み」ということから、少々離れるものの、「姫島村という行政」として、「村内の産業化への強力な支援」、それによる「村の働く場の確保」、それに際する「村民の村内への就職に対する村としての強力なバックアップ」等々が、現地調査及び各種文献(割愛)から確認された。これらは、「空間・生活構成面からの持続性の仕組み」ということから、確かに離れているものの、ここでの「包括的支援」、「ワークシェアリング」、「製品のデポジット制度」等々の採用は、それらの基礎・基盤の要因として位置づけることができよう。殊に、「ワークシェアリング」に係る「姫島村のラスパイレル指数」の相当の低さは、注目に値しよう。(平成23年度の全国市区町村のラスパイレル指数の最下位が姫島村である。)なお、当地は、「隠居屋」をもつ隠居慣行の地域の一つである。
- 12) 本論文は、紙面の関係から、図1-5に至る手続きについては、極めて簡略化して示している。この点、ご理解頂きたい。結局、その図1-5を仮説とし、それを検証する形式により、論文を構成致した次第である。

＜参考文献＞

- 1) 山崎義人、橋本大、重村力、山崎寿一、上野浩一、杉野香織：人口増加しつづける坊勢島における転居の実態 地域環境の持続に向けた地域人口の再生産に関する研究・その2、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.613~614、日本建築学会、2006
- 2) 橋本大、山崎義人、重村力、山崎寿一、上野浩一、杉野香織：人口増加しつづける坊勢島における住宅・宅地の循環的利用 地域環境の持続に向けた地域人口の再生産に関する研究・その3、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.615~616、日本建築学会、2006
- 3) 門永琢、本多友常、平田隆行：雑賀崎における住居変容と親族ネットワークに着目した集落持続性 傾斜環境における住空間変容の要因分析、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.605~606、日本建築学会、2006
- 4) 徳勢貴彦、鳴海邦碩、岡絵理子：歴史的集落地の環境評価と持続性に関する基礎的研究、日本建築学会計画系論文集、第604号、pp.69~75、日本建築学会、2006
- 5) 乳深真美、千賀祐太郎、中島正裕：農村集落における集落内諸集団と集落活動の持続性に関する基礎的研究 滋賀県甲良町北落集落を事例として、農村計画論文集、第5集、農村計画学会、2003
- 6) 西塚和音：伊豆諸島利島における農村集落の持続性の変化、日本地理学会2002年度秋季学術大会 集落部門、発表番号：309、日本地理学会、2002
- 7) 有田宏紀、植木慎哉、林田大作、平田隆行：漁村集落の持続性に関する研究 和歌山県塩津地区における空き家・空き地化に関する考察、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.583~584、日本建築学会、2008
- 8) 山崎寿一：住居を核とした農村の持続性に関する試論ー環境、コミュニティ、生活文化の持続と相互連関ー、農村計画学会誌、Vol.29, No1、農村計画学会、2010.6
- 9) 宮本常一：瀬戸内海の研究 島嶼の開発とその社会形成ー海人の定住を中心に、未来社、1965
- 10) 山口県文化財愛護協会：周防祝島の神舞行事、1978
- 11) 株関係の文献：寛政年間以前のもので推測される資料、「東部株内制度控 徳川時代株分け制度 石丸左馬頭株分け始め」資料、明治時代の株と、その株内一覧の資料、「岩見島荒神石祠由緒及沿革」の資料…明治時代の株と、その株内一覧の資料は文10)のP69~72参照。
- 12) 上関村：「祝島自一番至二〇二〇番 字地引絵図 上関村」地籍図、1886(明治19年)
- 13) 森保洋之、星出直也：祝島における集住空間の構成要素に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第585号、pp.9~16、日本建築学会、2004
- 14) 池田亜依、森保洋之：祝島集落の空間構成に関する研究ー空間構成要素の枠組みの考察ー、日本建築学会住宅系研究論文報告会論文集1、pp.185~194、日本建築学会、2006
- 15) 西岡いづみ、森保洋之：祝島集落における家・通り・まちの持続性に関する基礎的研究、日本建築学会 住宅系研究論文報告会論文集4、pp.53~62、日本建築学会、2009.12
- 16) 西岡いづみ、森保洋之：集落を対象とした持続性に関する基礎的研究 祝島事例を中心にみた集落再生に向けた考察、日本建築学会大会学術講演梗概集 選抜梗概、pp.41~44、日本建築学会、2010.9
- 17) 西岡いづみ、森保洋之：集落を対象とした生活・空間構成の持続性に関する基礎的研究 祝島事例を中心にみた集落再生に向けた考察、日本建築学会 住宅系研究論文報告会論文集5、pp.243~252、日本建築学会、2010.12
- 18) 佐々木香菜子、森保洋之：集落における古民家とその近隣との順応性に関する研究 宮島門前町を対象とした考察、日本建築学会 住宅系研究論文報告会論文集5、pp.107~114、日本建築学会、2010.12